

「本当の幸せ」 ～あなたは縛られていますか～

マタイ5：1～11

マタイ6：9～13

私たちは幸せになりたいとは思っています。しかし幸せとはこういうものであると説明ができません。それではどのように幸せになるのか、幸せになった事を実感する事は困難です。私たちが物事を判断する時、標準や基準から比べます。それが曖昧な事を漠然とっています。私たちは幸せになりたいと漠然とは思っています。が、何か明確な基準がありません。それでは目の前にある幸せに気づく事ができません。幸せも分かりません。あなたは今、幸せでしょうか、と聞かれたらどのように答えられますか。自分に明確な基準がないために、人との比較で判断します。人との優劣をみて、幸せではないかと思えます。これは自分より不幸な人を見て自分は幸せであると喜んでる事になり、それは本当の幸せでしょうか。「幸」という漢字の成り立ちはいくつかありますが、一般的には手錠をかけられた人が開放される事が漢字になりました。「民」の意味は「王によって束縛されている」ということです。民衆とは王の支配下になり、繋がれている事を指しています。この束縛から開放される事が幸せということになります。「倅」という「仆」がついている漢字もあります。これは人が土地と羊によって和解したことを指しています。そこには羊すなわちイエスキリストの犠牲があったということになります。私たちはアダムとエバが罪を犯してから苦しんで糧を得ること、苦しんで子供を生むという縄目を負って生きています。私たちに罪の縄目が付きまっています。人は生まれた時からの自己中心です。パウロは「したい事ができずにしたくない事を行ってしまう」と言っています。言っはいけない事は分かっているにも関わらず、言ってしまいます。育った環境がすべての原因でもありません。それが私たちの根底になぜあるのかという事が深刻な問題です。幸せは1人では築く事ができません。縄目から解かれ、一緒に喜べる人がいるから幸せなのです。それを得ることができないのは心も体も縛られているからです。私たちは相手に心を開き、優しく接した方がいいと分かっているのにできません。それは束縛されているからです。私たちは生きてきた中で、周りから傷つけられてきました。それ故、また傷つけられる事を恐れています。それは心で感じた良い事をそのまま素直に行動することを留めています。「ありがとう」「ごめんなさい」など素直に言えません。例えば相手より先に謝っても、当たり前のような反応される事によって自分が傷つきます。そのような事があった後は自分から謝ることはできなくなります。それをしていくと自分を振り返り、自分の事を見つめる事ができなくなります。解決することができないために自分の心にどんな傷がついているのか、過去にどんな事があったのか見返さなくなります。それ故に人は心を隠すために外見を着飾っていきます。カマスの入っている水槽にガラスの仕切りをいれます。ガラスの仕切りにあつたカマスは、その向こう側へは行く事ができないと学習します。ガラスを仕切りを取り除いたとしてもカマスはそれを越えることはできません。他のカマスが仕切りがあつた場所を越えてくとそれをみて自由に行き来するようになります。人は隙があれば何でも向こう側へ行こうとします。人の素晴らしいところは無理な事を乗り越えるからです。私たちクリスチャンは無理なことを乗り越えていくことを止めてはいけません。カマスの水槽の例のように、見えない仕切りを取り除いて下さる神がいるのです。神は私たちが持ってしまった縄目を取り除く事ができます。しかし私たちが過去の自分と向き合えなかった時、取り除く事が可能なのに、治療もしないようになっています。それで不幸せになると文句を言います。私たちは自分を見つめ、向き合えなければいけません。周りと比較して感じる幸せが本当の幸せでしょうか。しかし本当の幸せについて知ってしまうと自分が幸せでないことに気づくために知りたくありません。過去の縄目にしばられて、覆われて生きています。ですから比較の中で一時の幸せを知る事を求めてしまいます。今までの殻を破って向き合っていくましよう。このようにメッセージなどで言われた時は、向き合った方がいいと思っているのです。しかし現実を直視した時、向き合うことを後回しにしてしまいがちです。(マタイ5：1～11)ここは山上の垂訓とよばれている箇所です。心の貧しいものは幸いであると書かれてあります。心が貧しいとはどういう意味でしょうか。心が冷たい人のような表現に見えますがギリシャ語では心を探し求めている人をさしています。そのような人は幸いだからと断定しています。ここでは自分の貧しさを知り、天の豊かさを求める人は幸いであると伝えているのです。心の貧しさとは私たちの心が傷つけ、傷つけられてきたことです。自らの汚さと戦おうとする人です。地上における現実と向き合うが故に天における豊かさを求めるようになります。それはイエスキリストの愛を求めるようになるので幸いになると言っているのです。次に悲しむものが取り上げられます。私たちは何に悲しんでいるでしょうか。怒っている時は周りに向かっています。アダムと神の前に立った時、心はドキドキしていたでしょう。その時、自分に向き合うことができずエバのせいにするような発言をしてしまいました。自分が間違っているけれど、他人から正しいことを言われると受け入れられない時があります。しかし自分が間違っていることは分かっています。そして私たちが嫌いな人というのははたいてい自分に似ているからだといわれています。自分の罪を知る事が私たち自身を幸いに導くことに繋がります。自分が悪かったと認めている人に対して責める事ができるでしょうか。周りの人が困っているのを助ける人は反対に自分が困っている時に助けてもらえます。そういう時にこのように祈りなさいと主の祈りを教えています。(マタイ6：9～13)神の心が自分の心になるように祈りましよう。それが幸せに近づく道です。神は私たちの罪を指摘したいわけではありません。しかしその罪が私たちに手錠をかけています。私たちは赦す権限のある神のところへ行って赦されなければなりません。そうすれば私たちの縄目はとれます。私たちは自分の心に縄目が一部分でもあると進む事ができません。私たちは過去や経験に縛られていないでしょうか。私たちは縛られているとは薄々感じているかもしれませんが、自分がなぜこのような行動をしてしまうのか。私たちは自分と向き合えなければ理解することはできません。本来は見たくないために逃げてきたからです。しかし縛られていることに気づいたのであれば、その時に向き合っていくましよう。私たちは原因となる心の内を向き合って解決しなければいけないことは分かっています。私たちの生き方の根底は素晴らしいのですが、それを縛っている原因に気づき、変えなければいけません。それが本来の生き方を屈折させてしまうからです。ですから、このようになりたいと思ってもそれができなくなってしまいます。相手を傷つけたくなくても傷つけてしまいます。北風と太陽のように時に冷たい北風になり、相手に接してしまう事があります。それはお互いに傷つけあってしまいます。それではお互いに幸せであることを感じる事ができません。①**幸せになるために、重荷をおろしまし**
よう。自分が赦されている事を知り、相手を赦していくしかありません。「何でもあなたが地上でつなぐなら、それは天においてもつなぐれており、あなたが地上で解くなら、それは天においても解かれているのです。(マタイ18：18)」ここで書かれている「解く」とは赦すということです。「つなぐ」とは赦さないということです。地で赦すならば、天でも赦されているからです。私たちは憎んでいる限り幸せになることはできません。縄目のほとんどが憎しみです。愛の反対は憎しみだからです。愛とは赦すことから始まります。赦せない心が相手を傷つける心になり、自己中心になってしまいます。アダムは神に釈明する時、エバに転嫁しました。その時のエバの気持ちはどうだったのでしょうか。そしてエバは蛇に転嫁しました。この姿はまさしく私たちです。ですから私たちの心にある重荷を降ろしていきましょう。そのためには相手を赦していきましょう。赦されない罪はありません。それではキリストの十字架は不完全になってしまうからです。ですから赦して下さる事を信じて、自分も赦していきましょう。私達はお互いに「ごめんなさい」と言った時、とても暖かい気持ちになります。赦す力というのはとても大きなものです。赦すことは愛の根源です。主の祈りの中で「私も負目のある人を赦しました」という事が大事です。憎しんだままで赦す事はできません。憎しんで赦せない気持ちがある場合、誰に接するときもその気持ちが出てきてしまいます。教会に来て感謝をさげます。それは私たちが赦されていることを感じ、私たちは赦す事ができるからです。それはすべて私たちのためです。自分に縄目があると思うのであれば、とっくるところにいくしかありません。私たちが赦さなければなりません。しかし素直に相手を赦せない時もあります。その時は神に助けてくれるように祈り、自分が赦されている事をもう一度感じる必要があります。そうすれば、相手を赦す事が少しずつできるようになっていきます。私たちは愛されなければ愛せません。赦されなければ赦す事はできません。神はお手本として十字架にて愛し、赦しを与えてくださいました。私たちは先に謝りましよう。それは先に謝ることは負けではありません。幸せになるために②**口を制することが大切です。**私たちの心がない事を行ってしまう「口」が問題です。私たちが隠れてしようとしていることは良い事ではありません。近い人にも言えない事はないでしょうか。一緒に向き合って戦うべきなのです。口から発する言葉は生きて働いています。「ことばは神であつた(ヨハネ1：1)」のです。自分の発した言葉は自分で責任を取らなければなりません。種まきと刈り取りの法則です。言葉が悪ければ、私たちの人生がよくなることはありません。相手を傷つけることは自分を傷つけていることと同じです。(Iペテ3：8～10)心と裏腹なことを語ることは偽りであり、するべきことが分かっているのにしないことも偽りです。「幸せな日々を送りたい人は…」このように歩んではいけません。聖書は私たち人間の説明書のようなものです。その説明書に幸せになりたい人はこのようにするようとかかれています。そこに口を閉ざして偽りを語ってはならないと書いてあるからです。普段偽りばかりいっているとき本音を語る時にいえなくなります。いつも嘘ばかりついてしまいます。欲が罪をうみ、罪が熟すると死に至ります。私達の普段の生活の中で口によって罪を重ねているのであれば、自分の人生を振り返り、欲の中で生きないようにしましよう。あたたした生活をしていると解決もできず忘れてしまったり、寝てしまったりします。③**本当の自由を知りましよう。**幸せというのは自由ということ。すべて強いられるものではありません。自分のしたい事をする事ができるこれが自由であり、幸せなのです。手錠をかけられた状態でも何をしても幸せではありません。(ローマ8：18～21)本当の自由とは被造物が願っていることであり、罪の縄目から解かれる事を意味しています。自由になるには赦されている事を確信するしかありません。縄目をつけられたままでは自由になれません。現実起こってきた事を赦し赦される事が大事です。そうしないと人と向き合う事ができません。神は両手をひろげ私たちが待っています。私たちが向き合うだけです。神と私たちの関係は相互関係です。私たちが開けないところに入ってくることはありません。そのためには縛られている縄目を取り、本当の幸せを知りましよう。そして私たちが何のために生きているのかを知ることが本当の自由です。自分の存在理由が分かるから幸せなのです。私たちは心の縄目からとかれて自由になりましよう。(要約者：平澤一浩)